

文学研究において 「女性学」は成立しない

三宅晶子

文学研究において、女性学は成立するかという題を与えられましたが、女性に関する問題を社会科学として、意識調査など、統計学的に考えることは成立します。言語学では、低次の記述的方法をとれば、言語現象として、女性の用法と男性の用法の差を意識の変化として捕えることは可能でしょう。しかし文学作品を研究する場合に、女性学的方法により、何らかの証明できる答が可能でしょうか。答ははっきりしています。不可能なのです。

一つの文学作品を解釈する場合、たとえその作者が女性であっても、女性として書いたか、人間として書いたかは、作者が公言しない限り不可能です。しかしたとえ作者が公言しても、作者のいう「女性」は人間性のうちの一部にすぎません。生物学で牝学が可能か、考えて下さい。鳥の牝学で鳥は卵を生む生物だと考えても、卵を生まない鳥もいて牝学が必要になります。牝学と牡学を合わせれば、何のことはない、生物学になってしまいます。

その上、女性作家の作品には女性的特色が現われ、男性作家の作品には男性的特色が現われるのでしょうか。渡辺和子氏はそう主張されますが、これは19世紀の有名な古典的事例を忘れていただけです。ジョージ・エリオットが、メアリー・アン・エヴァンスという女性の筆名だったことは容易に見破られませんでした。最初に怪しんだ批評家は、狩猟の場面がないという所に注目したといいます。反対に男性が女性になって書いても一向にかまわないわけで、紀貫之の「土佐日記」を男性が書いたものだから駄目だという批評はなく、あまりに男性的でありすぎる場面も見当たりません。

文学作品を女性学の対象とするには実は致命的な欠陥があることに、読者は気付かれたでしょうか。それは文学作品は芸術で、虚構にすぎないということです。女性が書いても、男性が書いても、この条件は消えません。そのため、たとえばシャーウッド・アンダーソンの「ワインズバーグ・オハイオ」に、弱い消極的な女性ばかり出て来るのは、アンダーソンの母親がそんな性格だったから、という批評は証明できないのです。外の理由、芸術的理由がいつも存在するからです。アメリカ中西部の曠野にできた、無機質の町の非現実感と、アンダーソンの消極的な女性はいつも、彼の印象派的短篇集に似つかわしく、そのためにアンダーソンは消極的な女性を書いたとも言えるのです。

この「芸術的理由」を取り去ってしまわなければ、文学作品で女性について研究することはできません。ですから、女性学的研究者を自認する人たちは、「文学作品」なるものは存在せず、一切の「文学」とは単にヒューマン・ドキュメントにすぎず、文学作品も、法令も、お医者さんのカルテも、洗濯屋の請求書も、同じという仮定に立たなければ、女性学的研究は不可能です。学生さんの中で、女性学的研究はいくら考えてもわかりません、とおっしゃる方々は、この大前提に気付いていないのです。

しかしこの大前提は正しいのでしょうか。例をあげて、ホーソンの「緋文字」のヘスター・プリンを見ましょう。これをヒューマン・ドキュメントとして、17世紀清教徒社会が女性をいかに虐待したかを研究したとします。しかしこの研究には、ホーソンが芸術作品を書いたという事実が抜けているのです。出来上った「研究」は、ラスキンの例をかりると、人間に骨格がないと仮定して体操の効果論を論じるようなもので、よく書け、博学なエッセイかも知れません。しかし誰の役にも立たないことはたしかです。ホーソンは第1に17世紀の北米マサチューセッツ植民地について、ハッチンソンの「ニュー・イングランド史」による18世紀の啓蒙思潮の批判しか知りませんでした。そのおかげで17世紀の植民地については非常に暗い時代と考えていたのです。だから結婚した女性を愛した牧師は絞首刑になると考えていたのですが、実際は違っていま

した。現在、知られている資料によりますと、初代植民地の指導者として有名な、ジョン・コトンの息子は、牧師になり、3名の既婚女性とあやまちを犯しましたが、神と会衆の前に告白して許され、離れ島の教会に左遷されただけのことでした。史料として正確でない、虚構の「緋文字」の価値は、ホーソンが考えた、小氷河期の17世紀、植民地の暗さと対照的に、愛の火が燃えるAの字の輝きという芸術の効果だったのです。これを事実としたら誤りですから「緋文字」から文学という一点を除いたら、何一つ真実は残らないでしょう。

では、文学の女性学的研究とは何でしょうか。女性学のように、事実を1ヶ所無視して、結論を出してしまう方法を「デコンストラクション」(脱構造)と呼びます。この方法によると骨格のない人間の体育といった問題について書くことができるため、既に多くの本が書かれて来ました。しかしこんな方法の「研究」なるものに影響されて間違った答を覚えないうちに、私はどんな本でも、脱構造だとわかると、屑入れに処分して損害を最小限に抑えるようにしています。ご存知のように、イエール大学の英文学科は脱構造に組した、ジェイ・ヒリス・ミラー教授が、カリフォルニアに転出して以来、脱構造とは縁を切ってしまいました。昨年夏、イエールの図書館を訪れた時の噂では脱構造は1994年で終るだろうという予想でした。良いことです。脱構造の流行が始まった時、デューク大学でわたくしと共に研究した友人たちは皆、気が狂いそうだと深刻に受けとめていました。アメリカの学界に恐ろしい墮落が始まってしまった。これは耐えているうちに終るだろう。しかし学生に大へんな被害を与えるだろうと言うのです。

なぜ脱構造がいけないのかと申しますと、学問とは個人のもではなく、公けのものだからです。困難で不可解な問題は多数の人たちが協力して解いて行かねばなりません。ミルトンの「失樂園」が完全に解釈される迄、200年はかかっています。その過程は透明で、誰にもわかるように書かねばなりません。目標に合わせて過程を狂わせたら勿論、研究仲間から追放されるでしょう。資料の妥当性は証明されねばならず、資料が原稿なら、原稿の読み方の正しさを

公けにして、意見を交換し合うのです。高速道路を皆で作っている時に、突然、柔らかなコンクリートを剥いでしまうグループが現れたら、どうしたらよいでしょう。イエール大学がしたように追放する以外はないのです。脱構造の論文を書く人は、他の学者たちの生涯を捧げて作ったものをこわし、後に続く人たちを迷わせ、貢献ではなく、破壊によって、自分個人に名誉と昇進と権力を要求するからです。しかし真実をこわすような学問は学問でなく、出鱈目と呼ぶべきでしょう。

女性学が脱構造の仲間であることを理解している学者は残念ながら少数です。第1に学問を作ったことのない人たちにどうして今自分が学問を作っているか、こわしているか、わかるでしょう。学問を作る訓練は大学のセミナーから始まり、博士論文が修了した時点で一応修了するのですが、わたくしの経験ではその後8年間努力して、やっと長い論文を専門家間で認めてもらいました。わたくしの場合は、博士論文が終わってから、すぐ日本に帰ってしまい、5年後にボストンのノース・イースタン大学で、大学院を教えるように招かれて、始めてアメリカの学者と平等と認めてもらったのです。

学問を作り出す訓練は、日本の英文学科で私が学生だった1948年～52年には不可能でした。第1資料がありません！わたくしの場合は少し特殊でした。神戸女学院の学生だった頃、1人で哲学書に読み耽りながら、学問とは何かと考え手探りしていたのですが、決心して実験科学のコースを取りだしたのです。その当時、英文学科の学生が実験を要するコースを取ることは許されていません。実験生物、実験化学と進んで行き、どうしても科学の論文を書く方法が掴みず、最後に4回生になって、学生2人だけの実験物理で悪戦苦闘しながら、毎週提出した論文を真赤に訂正されながら、やっと了解したのです。それは事実で証明できないことは数字といえども書くなという単純なことでした。しかし日本の大学で、文学部にいる限り習えないことだったのです。アメリカの大学院で、英文学科の博士課程に入れた日本人は母校のデューク大学ではわたくしが最初でした。その理由は、まったく1行書いては証明するという、幾

何学のような論文を書き続けたからでした。英米文学で博士論文を書いた時は、日本人の女性では最初でした。

学問を作らず、ただ英米人の研究の結果を追い、そこから一步も出ないようにして「業績」なるものを作っている日本の英米文学者にとって、脱構造も女性学もただ流行として受け取られたようです。しかし他人の結果は、追実験をしてから使うというのが原則です。わたくしは学生に、アメリカの誰それがこう言っているという証明を禁じ、ずい分驚かれましたが、同時に非常な刺激を与えてまいりました。そして女性学的方法は、脱構造というこの一事で、わたくしのセミナーには厳禁いたしました。学生は何より世界中の誰が見ても正しい研究法を学ばねばならないのです。その訓練ができる前に、こわすことを習うなど、教授に毒を与えられているようなものなのです。

では女性学的方法は証明できないというその致命的な欠点はどのようにして補われているのでしょうか。数年前の夏、1980年代の後半に、まだ、ライフ・ウェアクの原稿の手入れに没頭していた頃、デューク大学の図書館を出て来た所で、1994/1995年に神戸女学院に来て下さったストランドバーグ教授と出逢い、のんびりとくつろいだ話をしながら、カフェテリアに入った途端に一緒になったのは、世に轟ろく女性学批評の大家、ジェーン・T氏でした。何も知らなかったわたくしは、いきなり彼女と討論に入ってしまう、昼御飯はどこに入ったのか、周囲では諸先生がじっと耳をすませているという始末でした。こちらは前述のように、女性学的批評は、範囲の限定が不可能だから成立しないという考えでした。走った距離を知らずに速度の計算ができるでしょうか。これに対して彼女は特定の文学作品を女性学の正典（キャンオン）として、範囲を決めればよい、と主張しておられた時、神学部の教授の方が、のどかな声を上げられました。「ジェーン、君は用語の間違いを犯している。正典ではなくて、お経（スクリプチャー）と言うべきだよ。」これには笑ってしまいましたが、わたくしがこの討論を報告した時、友人でテキサスの文学者は恐ろしい表情で繰返していました。「あなたは全くのどかな声で、と言ったわね。何というこ

しょう。」そして、その後、この時の神学者の予言は正しかったことに圧倒されたのです。走った距離を測定せずに速度を計るようなことを、女性学的批評が繰返しているうちに、判定不可能な結果を皆の合意により人工的に作るようになったのです。決まり文句がその正典なるものにできてしまいました。日本であれば、渡辺和子氏の本はまさに正典を並べ、決まり文句のお経を並べたものに外なりません。エリカ・ジョングなら、「女性の教養小説」と言わねばならず、サラ・オーン・ジョエットなら、「レスビアン」、シルヴィア・プラスなら、男性に言葉を奪われた被害者というのです。しかし詩人とは言葉を創造する人間ではなかったでしょうか。

また女性学的批評家たちは、このお経に書いてない質問をすると、そんな話は聞いたことがない、と胸を張り出しました。最初、わたくしは自分の無知を告白をしていると考え、謙遜の言葉と誤解していたのですが、女性学に縁のない人を貶しめる高慢の言葉だったのです。お経に入らない思考過程は曲げ、追放し、ひたすらにお経に合わせるやり方を見ていて、わたくしは突然思い出しました。あれです。スターリン時代（1958年以前）の日本史学を制覇したマルキシズムの学者とそっくりなのです。そして、女学院の学長だった山口光朔先生は、マルキシズムにより追放されて、アメリカのカリフォルニア大学で教えて苦勞されたのでした。

フレデリック・ジェームソンと言えば1992年の流行で、もうすたれたかも知れません。文学作品の社会学的研究のために幾つかの型を書いた人で、デューク大学のフランス文学の教授です。1992年の夏、国際比較文学会にわたくしが司会者の1人を勤めさせられた時、講演を聞きましたが、「女性学批評のある限り、我々は反理性主義を清算できない。」と切々と訴えておられました。

イエールは、脱構造に続いて女性学も追放してしまいました（1978）。それ程断乎とした態度をとれなかった大学は大変でした。スタンフォードのマジョーリ・ベルローフ教授が1987年頃京都に来られた時、わたくしが女性学を教えてないと聞き、目を丸くして、どうして逃れているのかと迫って来ます。わた

くしが、「自分は女より男の方に興味を持っていると宣言している」と本当のことを申しますと、鍋の底が抜けたように大笑いをされました。彼女は女性学をきらい抜いていたのに、集団の圧力に勝てなかったのです。私の母校、デューク大学では、先生方よりも卒業生が、ニューヨークの新聞で実名をあげて大論戦だったそうで、数年間、誰も彼もがこちらに切抜きを送って来られました。最近は少し落ち着いた様で、ジェーン・T氏は教育学科の方に移られるそうです。

脱構造と女性学に関する論争は1970年代後半に始まり、1994年でどうやら終りそうです。その間に15年ばかり、わたくしがつくづく身にしみて考えたことは、米国人の学者にとって、学問をこわされるという恐ろしい体験も、日本人にはただ情報として伝わっているという不思議さでした。英米文学に関する限り、日本人の学者はただ情報の伝達係りにすぎなかったのです。誰1人、本当には学問を作っていなかったのです。それがこのように簡単に脱構造と女性学批評が神戸女学院大学にも侵入して来た理由でしょう。

神戸女学院大学という離れ小島で、1人でアメリカのエズラ・パウンド協会と、共同作業をして来たものですから、わたくしは他の英米文学の先生方のように、女性学批評について安らかに、客観的にもなれません。学生が研究の基礎を学ぶべき時に、女性学批評という破壊性の脱構造を教えられているのを見ると、自分の子供が針を含んだ食事を食べさせられているような苦しみを感じます。「神戸女学院大学の学生など、学者として訓練するのは余計なことだ」など考えないで下さい。わたくしに実験物理を教え、研究の基礎を作った下さった先生は、その様には考えておられませんでした。お昼休みでも私を横に坐らせて、計算尺でロガリズムなどを教えて下さった昔の先生を思うと、声を大にして言いたいと思います。神戸女学院大学の学生でも、将来の学者の卵はいるかもしれない。英文学科の学生を相手に、いつ迄も黒板の前でカリキュラスの式を書いて下さった先生。彼は戦争中、川西航空の研究班でしたが、研究者としての生涯は、敗戦の年に30代半ばで終わってしまったのです。だからわ

たくしのような、絶対に科学者になれないものに情熱を注いで下さった先生。文学という時間のかかる分野を選んだため、わたくしはその時から40年後にやっと先生の情熱を稔らせることができました。アメリカで本を出し、「ロンドン・タイムス」に批評がのったのですが、その批評をお見せする前に先生は逝かれました。学問とはどんなにこわされても芽を出す雑草ではなく、真実に対する情熱を媒介として才能から才能へと注意深く手渡される伝統という貴重なものなのです。

わたくしが今申し上げたいことは文学における女性学的「研究」は即刻やめるべきだということです。情報の速度が早まるにつれ、学問を作る大学と、学問の受渡しだけの大学に両極化が進んで行くでしょう。その時、女性学などという擬似学問を平気で続けていると学問を作れない大学として神戸女学院は位置づけられるでしょう。しかし、たとえ学問的水準は低くとも反合理主義の「学問」、真実をわざわざこわす極悪の「学問」は学生に伝達しないという正しい道をとるべきです。日本全国的女子大学が地位を失った今、東京では津田塾と東京女子大、関西では神戸女学院大だけが、「一流大学の権威に迫る所迄行っている」と栗本慎一郎氏も書いてくれました。それは戦後50年をかけて作られたもので、是非、女性学を追放することにより、神戸女学院大の知性と道徳性を見せて欲しいと思います。

Summary

A Feminist Study in the Study of Literature Is Invalid

Akiko Miyake

A Feminist study in the study of literature can no more exist than a Feminist study in biology. In the latter, if a researcher collects only the female individuals of a species, one can not describe the whole species. One must write that a beetle always spawns eggs. This can not be true.

The crucial lacuna in a Feminist study of literature is to ignore that literature is not just a human document, such as a medical case records or even laundry bills. Literary work is a fiction, and a work of art. Suppose a painter represents a female figure with a remarkable contrast of light and darkness. Does this signify anything about females? You can understand what a nonsense a Feminist study says, if it argues about, for example, Hawthorne's *The Scarlet Letter*, theorizing what Hawthorne's idea of women is.

Feminists necessarily and arbitrarily drop out the idea that a literary work is a work of art. Since this is to claim an utterly false idea, a Feminist study of literature is deconstructive. The sole result of deconstruction is to destroy all the values of scholarship. Hence the only right thing with the Feminist study of literature is to terminate it at once. Otherwise it will destroy the future of any promising student, like feeding babies with food including needles.